

北斎描いた茶畑 令和は共生の地に

富士の木内さん

富士市中野の茶農家木内陽子さん(78)が、障害のある人が農業現場で働く「農福連携」に取り組んでいる。富士山を望む木内さんの茶畑は江戸時代の浮世絵師葛飾北斎が「富嶽三十六景」に描いたとされる歴史的価値のある風景。景観維持と障害者雇用の創出を両立する仕組みで、木内さんは「ワインウインの関係が築けている」と喜ぶ。

11月上旬、秋晴れが広がった茶畑では10〜70代の福祉施設利用者13人が草刈りに精を出した。休憩中には前日の雨でぬかるんだ地面の感触を楽しんだり、富士山にかかる雲の形を観察したりと、生き生きとした様子をさせる施設利用者を木内さんは温かく見守った。

小学校教諭を定年退職後、父親から畑を継ぎ、夫の和昭さん(82)と2人で茶生産を始めた。茶畑の総面積は約27畝。畝の間隔が狭く機械が入

高齢背景、「農福連携」へ挑戦



らないため、年齢を重ねるにつれて農作業は重い負担になっていた。近所では担い手不足から茶の木を抜いてしまう畑もあったが、「北斎

が見た風景をなくすわけにいかない」と最善策を模索。互いの需要を満たし、障害者の社会参画促進にもつながる点に魅力を感じて「農福連携」への挑戦を決めた。

施設との仲介は、県内各地で障害者支援に取り組む認定NPO法人「オールしずおかベストコミュニティ」(静岡市葵区)に頼んだ。木内さんは「2人だけでは手が回らない。先祖代々続く大切な茶畑を一緒に守ってもらっている」と感謝する。

今夏から木内さんが仕事を依頼する就労継続支援B型事業所「みんなのわが家(三島市)」の利用者にとっても、農業はうれしい仕事。神尾久美子理事長によると、太陽の光を浴び、土に触れながら行う畑仕事では、利用者の明るい表情を見ることが多いという。「五感を刺激しながら仕事ができる精神的安定につながる。歴史ある土地で働かせてもらえて光栄」と話した。(富士支局・鈴木志穂)

11月、富士市中野

(令和6年11月17日・静岡新聞)

農福連携 認知度向上へマルシェ 葵区、食品販売やワークショップ



農福連携事業所が出店した「ノウフクマルシェ」＝静岡市葵区の七間町

農福連携事業の認知向上などを目的にした「ノウフクマルシェ」がこのほど、静岡市葵区の七間町名店街で開かれた。

県の委託事業としてNPO法人オールしずおかベストコミュニティが企画し、不定期で開催している同マルシェ。農福事業に取り組む同市駿河区の「春筍ファーム」と富士宮市の「EPO FARM」の2店舗が出店し、メンマの試食・販売や羊毛を使ったワークショップを行った。

NPOの担当者は「より多くの人に農福連携の取り組みを知ってもらい、障害者の待遇向上につなげたい」と話した。

(令和6年11月20日・静岡新聞)